

巻 頭 言



昭和 35 年を鉄鋼技術躍進の年とせよ

絹 川 虚 舟*

鉄鋼連盟本年々頭の祝賀会の席上、池田通産大臣から、わが国産業各界に亘つての貿易自由化の大方針が発表されたことは既に周知のことである。この政策の是非得失については、人おのおの意見もあるであろうが、しかし政策が一旦決定発表せられた以上は、徒らに政府の施策を批判するだけでなくこの自由貿易の線に添うて協力し善処してゆくだけの準備と心構えをもつべきである。特に鉄鋼業は総ての産業の基礎産業といわれている位であるから、その経営者、技術者等は他産業に率先垂範するだけのプライドがあつて欲しいと思う。

いうまでもなく、自由貿易ともなれば国内だけでなく世界の同業者が総て競争相手となるから、まずその需要地において最も安価であるということが絶対に必要である。ここに「安く製る」ということで研究の必要が起つて来る。

次に製品の価格が同一であるならばもちろん顧客は品質のよいものを買うのは当然であるから、製品の外貌、材質、寸度の正確さ等、品質のよいものを製る研究工夫がなされなければならぬ。それがためにはまた、時に製産設備の一部ないし全部を輸入更新する必要の起ることも、また技術導入の必要も起るであろうが、最も望ましいことはそれらが自国内で開発せられるということである。このためにも一大研究の必要なことは申すまでもない。

次に第三に問題となるのは如何に価格を安くし、品質がよくてもサービスが行き届かなくてはこれまた商売に勝つという訳には参らぬ。即ち納期が正確でしかも需要者の立場に立つて、その正しき使用法を指導するといったような事も、心掛けねばならぬことである。それがためには、われわれは、鉄鋼製品については、他のいずれの鉄鋼生産国の技術者よりも豊富な応用上の知識をもっていなければならぬ。ここにも研究の必要を痛感させられるのである。

これらのことは、今更こと新しく申すまでもなく、誰れでも容易に考え付くことではあるが、さてわが国鉄鋼業界の現状を見ると、果して如上の線に添うての研究が大いになされているであろうか多少の疑いなきを得ないと思う。

由来、わが国の経営者技術者の中には自らの研究によつて競争相手に打ち勝つてゆくという気魄が乏しく、盗人根性が抜け切らないで、他の技術はこれを何んとかして盗んで使うという不心得ものの少ないのはいかにも残念至極である。斯くいうと、いかにも同胞を誹謗するかの如くにも見ゆるであろうが、以下にその論拠を示して見よう。

第一、わが国の経営者技術者の中には他の特許を尊重しないで、これを盗んで無償で使っているものが少なくない。本文の執筆者等も実にその被害者の一人である。自己の気付かなかつた技術は、何も恥ではないから、正々堂々と特許権の分譲を得てこれを自工場に実施するという態度こそは、やがて自工場からより優秀な発明発見の生れる基となると思われるのである。

第二、わが国の技術者の中には他人の発明特許に対し、理不尽ないがかりをつけて邪魔立てをする

* 本会評議員、日本ステンレス株式会社副社長（絹川武良司）

者が少くない。これは研究の出来ないものがよくやる手段で、他人がある種の発明発見をしたならば、自らはその上をゆく発明発見をすればよいものを、その努力は怠つて徒らに他に邪魔をするのである。

第三、わが国の学会その他の工場見学会を見るに、そこにはいかに「招かれざる見学者」が多いことか。これらも経営者技術者の盗人根性によることと思われるのである。むしろ、今後の見学会には、学会その他の行事で多数の学者、技術者が一堂に集まれる機会に、その中から数人ないし数十人の専門家を招待して工場を見学せしめ、場合によつては自己の工場で研究工夫した技術を披露して、この技術を有償で他の同業者に採用して頂く機会を作るようにしたらよいと思う。

ところがわが国の現状は、全く反対で、縁もゆかりもないいわば専門技術に対して全くの門外漢が、多数工場見学に押し掛けて迷惑を掛けているに対し、最も関係の深い同業専門技術者は、いつも工場見学を拒絶せられるのである。これも専門技術者の盗人根性によることで、専門技術者に工場見学を許したとて、何等自工場の利益にならないからのことである。

若しも、他工場の優秀技術を実施するときには、必ず代償を支払つて実施するものだという習慣が出来ていたら、工場側も喜んで同業技術者専門学者を招待することと思う。

また、技術者の工場見学に際しても、盗人根性を丸出しにして、キョロ・キョロ工場の中を探し廻らずに、工場側の案内人に従つて、案内人が導くコース通りに應場に見学するよう心すべきではあるまいか。ところがわが国の見学会等では、いつも工場側にとつては「招かれざる見学者」の3人や5人は案内者の道順を離れて、勝手に工場の隅々にまで立ち寄る者が必ずあるに至つては、実に礼儀をわきまえない醜態の限りであると思う。

かような事は、独り国内だけの問題でなく、最近では外国に出張した技術者の中にもありと聞く。従つて、諸外国でも昨今は次第に工場見学を制限する傾向にあるともいわれている。

これらも盗人根性に「根をもつ」もので、他の研究を尊重し、これを自工場に実施するに際しては代償を支払うべきであるという觀念の欠如によるもので、やがてわが国も世界を相手に競争して覇を唱えんとするに際しては、心すべきことと考えるのである。

なお序ながら申したきことは、安い、よい品を製り、製品に対する豊富な知識をもつて、サービスをよくするには、製品の間口が広過ぎては、なし能はぬ事であるから、ますます間口を狭く専門化してゆくべきである。例えば普通鋼メーカーがさしたる研究もせずに、一時特殊鋼のある種のものが儲かるからといったような単純な理由から、特殊鋼界に進出するといったようなことは、慎むべきことと思うのである。

もつとも普通鋼工場と、特殊鋼工場とが互に連合系列化して景氣の影嚮を平均化し、企業の安定を計る方策をとることは、むしろ奨励すべきことで、本文執筆者の論ずる範囲外のことである。昔の財閥会社が繁栄したのは、多種多様の事業経営をなし、各工場が一時の景氣不景氣に左右されずに、技術に専念し得たからのことである。

以上私は研究を盛んにすべき事を述べたが、私の意味する研究は、従来の研究所等で出来る程度の研究だけを意味するものではなく「全工場が研究所である」といつた気持ちでやる全面的多方面の研究である。幸いに鉄鋼の指導的立場にある本鉄鋼協会等が音頭をとつて、本年こそわが国鉄鋼技術を飛躍的に躍進させるようにしたいものと思う。